

教育のデジタル化と学校図書館

愛知県学校図書館研究会長 高橋 雅 樹



令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響による臨時休業後、およそ2か月遅れで児童生徒の通常登校が始まりました。それ以来、学校現場は「新しい生活様式」への配慮等、感染症対策と両立した教育活動が求められています。また、元年度末から続いた臨時休業期間中の学習内容の補充、教育課程の見直し、授業時数確保等の難題をクリアしなければならず、授業スタイルも全員が前を向いた状態での一斉授業が基本となり、子ども同士が関わり合う活動を十分に取入れることができませんでした。つまりコロナ禍の今、新学習指導要領が示す「主体的・対話的で深い学び」の実現が難しい状況になっています。家庭でも「新しい生活様式」が求められ、ステイホーム中心の生活スタイルを強いられてきました。

しかし、視点を変えれば「ピンチをチャンス」と捉えることもできます。ステイホームは図書に親しむ絶好の機会であり、読書時間の増加によって本がもたらす多大な恩恵を享受した児童生徒も多いのではないのでしょうか。読書をすれば、出会うはずのない人と出会い、行ったことのない場所や時代に自由に行くことができます。また、いろいろな人の生き方を疑似体験することもできます。すなわち、学校の教育活動で制限された体験的な活動の多くは、読書による間接体験で補うことができます。このような考えの下、県内の研究大会の多くが中止や紙上発表を決定していく中でも、何とか第57回愛知県学校図書館研究大会を開催できないかと模索しました。そして、一堂に会しての大会ができないのであれば、無観客記念講演をネットで配信しようと考えました。本研究大会の歴史上初の試みですが、一年間の配信期間中、いつでもどこでも気軽に視聴できるため、より多くの方々に観てもらい、図書館や読書の魅力を感じ取っていただければと思っています。

コロナ禍により、テレワーク・リモートワーク・オンライン会議等が普及し、従来の価値観や社会全体の仕組みが大きく変わってきました。社会のデジタル化に後押しされるように、文部科学省の「GIGAスクール構想」が動き出し、学校教育も急速に変わりつつあります。すべての小中学生に一人1台のタブレット端末を配付することは、臨時休業等でのオンライン授業も可能にするため、保護者の大勢が早期導入を期待しています。まさに今、紙の教育からデジタル技術を導入した学校教育への転換期を迎えています。このような学校教育の急速な変化は、学校図書館の在り方にも大きな影響を及ぼします。

「活字離れ（本離れ・読書離れ）」は、以前から社会問題になっていました。そこで平成16年に「愛知県子供読書活動推進計画」が策定され、読書好きな子ども育成を目指すさまざまな取組が進められてきました。しかし、児童生徒の不読率（一か月に1冊も本を読まなかった児童生徒の割合）増加をくい止めることはできず、高校生に至っては約半数が一か月で1冊も本を読まないという有様です。このような状況の中で「GIGAスクール構想」によるタブレット活用が進んでいくと、学習への関心を高める効果等が期待できる反面、「活字離れ」の増加に拍車を掛けるおそれがあります。

学習において分からないことを調べるには、スピードの速さと効率の良さという点ではタブレットが便利かもしれません。しかし、欲しい情報のみを断片的な知識として得る場合が多く、出所によっては信憑性に問題があります。「便利＝危険」とはよく言ったものです。図書館まで足を運んで本で調べることは大変ですが、手間をかけて調べたものだからこそ記憶に定着するものです。また、図書館の本は情報の正確性が高く、1冊読めば一連の流れとまとまった情報を得ることもできます。

今後の学校現場において大切なことは、電子メディアと印刷メディアがそれぞれの持ち味を活かしたり足りないところを補い合ったりする、バランスのとれた教育の実現だと思います。学校教育のデジタル化が図られている今だからこそ、活字文化の役割や学校図書館の存在意義が問われています。子どもたちや教員に、活字による学びの重要性を伝えていくことも、愛知県学校図書館研究会の大きな役割の一つだと考えます。